

津山市史だより

2016.12
第7号



津山藩主松平家の入国行列図より女中差添の隊列

上：拾万石御加増後初御入国御供立之図（襖仕立て）

下：拾万石御復帰後初御入国御行列図（絵巻図）

津山藩主松平家には、参勤交代や江戸での登城・火消など、様々な場面の行列を描いた絵画資料が豊富に伝来しています。このうち参勤交代の行列図は、横長の襖^{ふすま}7枚に仕立てられたものと3巻の絵巻物の2種類ありますが、いずれも松平家が10万石に復帰した翌年に津山へ帰る行列を描いたものです。

2種類ともに明治になって描かれたものですが、隊列の順序に相違が見られます。松平家文書中の行列に関する文字記録と照合すると、襖仕立て図と合致すること、また絵巻図に多数の切継ぎ箇所や貼紙が見られることなどから、絵巻図↓襖仕立て図の順で作成されたものと思われます。

上の写真は、2種の行列図から同じ部分を抜き出したもので、藩主の発駕の3日前に出発する女中に付き添う者たちを描いています。この部分では、2種の行列図に大きな相違は見られませんが、肝心の女中たちについては、絵巻図のこの箇所末尾（上の写真の左上隅）に「女中人数不相分」とあるだけで、姿が描かれていません。描かれなかった理由は簡単にはわかりませんが、その謎を解く過程で、当時の社会の様子が明らかになるのです（4～7頁の研究ノート参照）。

（小島）

28年度第1回編さん委員会

8月23日 於郷土博物館

今回は事務局からの報告が主体の会議となりました。年度当初の職員の異動と今年度の事務局事業および各部会の進捗状況が報告され、今後の進め方について委員からいくつかの意見が出されたほか、あらゆる媒体を通じて編さん事業の広報に努めるよう要望がありました。

部会通信

自然風土・考古部会

(部会長…河本委員、副部会長…可児委員)
考古資料編の刊行に向けての作業がそろそろ大詰めです。執筆担当者からは各遺跡の原稿が徐々に送られてきており、これからはそれらの編集作業などが忙しくなってきます。

古代部会

(部会長…狩野委員、副部会長…今津委員)
10月30日に部会を開き、古代の資料編について協議しています。また、今後も継続的に美作地域の主要な遺跡を調査していく予定です。

中世部会

(部会長…三好委員、副部会長…久野委員)
9月24日に部会を開き、中世の資料編の内容について協議しました。また、市内では二宮の高野神社など、市外では奈良文化財研究所での再調査など、引き続き資料調査を実施しています。

近世部会

(部会長…定兼委員、副部会長…在間委員)
9月に部会を開催して、資料編・通史編の内容構成について協議した後、部会長から調査報告があり、活発な質疑応答が行われました。今後も引き続き、旧町村域での個人所蔵資料の調査を進めていきます。

近現代部会

(部会長…在間委員、副部会長…香山委員)
10月16日に津山市役所内で昭和5～13年頃の市議会議事録の調査を行い、22日には鏡野町ペスタロッツ館で町所有の「山陽新報」の調査を実施しました。議事録、「山陽新報」ともに資料の分量が多かったため、一度の調査では終わらず、これからも調査を継続していきます。

民俗部会

(部会長…前原委員、副部会長…安倉氏)
8月に部会を実施し、調査報告や今後の調査予定の協議を行いました。地域に関する様々な聞き取り調査も続いています。8～9月には、勝北歴史民俗資料館の民具調査を行い、必要に応じて写真撮影をしました。

民話編に関しては、今までに録音してきた音声データの文字起こしを継続しています。

編さん事業の経過 (平成28年8月～)

- 8月3日 第3回考古部会打合せ会
- 8月22日 第1回民俗部会
- 8月23日 第1回編さん委員会
- 8月27日 美作学講座第2回
- 8月 「市史だより」第6号発行
- 9月19日 第1回近世部会
- 9月24日 第1回中世部会
- 10月1日 美作学講座第3回
- 10月16日 近現代議事録合同調査
- 10月22日 近現代資料調査(鏡野町)
- 10月30日 第1回古代部会

津山市教委（生涯学習課）・美術大学共催
美術学講座
 — 津山市史関連研究から —

第2回 8月27日

「江戸時代の津山の鮎・築と藩主」
やな

講師・東昇氏

（京都府立大学准教授・近世編執筆）



第2回の会場の様子

毎回好評の「美術学講座」、今年度の2回目は、津山市史近世編の執筆者の東昇氏を講師にお迎えしました。東氏は、博物館学芸員としてのご勤務を経て、今は京都府立大学で教鞭を執るかたわら、日本近世史を幅広く研究されています。

はじめに、鮎漁と築の現状について、現在の川の漁法を概観した上で解説されました。築とは、川に誘導する仕掛けをつくり、下ってくる鮎を捕る漁法のことです。現在の築の写真も交えて、設備について説明されました。次に、江戸時代の書物に、美術の産物として鮎が出てくることや、津山藩が幕府に鮎を献上していることを示されました。

津山藩では、藩主などの川狩専用のために一定期間、川の一定範囲を禁漁にしていました。七代藩主斉孝が頻繁に川狩に行っている様子、8代藩主斉民が、実の父親である將軍徳川家斉に加茂川の鮎を内々献上していることなど、藩主との関わりを指摘し、また、調査過程で見え出した川狩に関する施設の図を紹介されました。続いて、築の設置場所が、綾部・院庄構に多い傾向があることを明らかにしました。

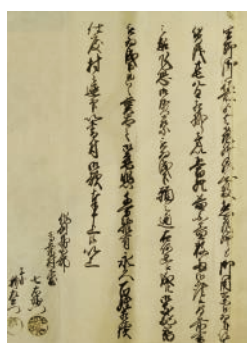
文化14年（1817）、郡代所は、家中の築設置に対する領民の影響を調査しています。その結果、築が、領民の田地水掛け・渡場の通行・水車稼などに大きな影響を及ぼしていると判明しました。それらの事実から、築は、領民の生業とのせめぎあいの中で設置されている点を指摘されました。

鮎という身近な魚を軸に、漁法からはじまり、藩主を中心とした、津山藩と幕府、そして藩と領民との関わり、領民の生活への影響まで、絵図や現地の写真を示しながらお話しいただき、聴講者の皆さんは熱心に聴き入っている様子でした。

～調査中の資料から～ 勝北郡24か村の嘆願書「生野代官の支配にしないで」

■近世部会で調査中である旧勝北町域の安井家文書の中に、勝北郡の幕府領24か村が文化14年（1817）に作成した嘆願書があります（左の写真はその一部）。末尾が破れて無くなり宛所は不明ですが、幕府領の中での支配替えを嘆願しています。要点のみ紹介すると、もともと飛脚便の往来がある大坂に比べて生野はそれが無く、わざわざ飛脚を仕立てる分だけ余計な出費がかさむため、従来通り大坂代官の支配に替えてほしい、というものです。その他にも、荒れ地が多く土地柄が悪くて困窮している状況が長々と述べ立てられていて、当時の村落の状況をうかがうことができる興味深い資料です。

（小島）



奥女中の参勤交代

— 津山藩の場合 —

妻鹿 淳子

はじめに

江戸と国元を二年ごとに行き交う大名の参勤交代は、よく知られているが、奥女中が藩主と相前後して江戸と国元を行き交うことはあまり知られてはいない①。ここでは、津山



写真I：拾万石御加増後初御入国御供立之図より御先女中の部分

藩奥女中の参勤交代の旅を紹介しよう。

津山には有名な大名行列図がある。行列の展示やその図録、参勤交代をテーマにした書籍などにはよく「拾万石御加増後初御入国御供立之図」として取り上げられている。この行列図は、藩主斉孝が將軍家斉の子銀之助(斉民)を文化一四年(二八一七)に養子として迎えることにより五万石が加増され、念願の津山松平藩草創期の一〇万石に復帰した後の初入国行列図である。しかし、これは当時のものではなく、明治一七年に完成したものである。上記の写真Iは、その行列図の前端に描かれた一部で、奥女中が藩主の江戸発駕三日前に出立したとあり、奥女中が藩主と相前後して国元に向かっていることが分かる。

では、いつから奥女中の参勤の旅が始まったのか、少なくとも津山松平藩初代宣富(長矩)の時代には見当たらないが、未だ調査中なので、明らかにできる行列図の斉孝一〇万石復帰後の初入国時と、次期藩主斉民初入国時の奥女中の旅を事例としてみよう。

斉孝一〇万石復帰後の初入国

一〇万石復帰後の文政元年(一八一八)五月九日、斉孝はまず日光に参詣するため江戸を出発し、参詣後の一六日に江戸屋敷には立ち寄るが、旅装をとかずそのまま江戸を出発する。それに先立つ一四日、奥女中たちが江戸を出立している(「江戸日記」、行列図では三日前とある)。女中たちは六月二日津山に到着し、翌三日に藩主斉孝が到着している。

国元に向け出立した奥女中たちの人数は不明だが、五万石時代の文化七年(一八一〇)四月二五日出立した奥女中は三人とあり、女中差添として二人の家臣が付けられていた。それに対し、文政元年時には女中差添として三人の家臣が付けられている。

行列図(写真I)からは「女中差添小泉兵衛」「女中差添御医師宇田川榕庵」「長局付御役人小林傳右衛門」とある。医師を含むことは、注目される。差添役人が二人から三人に増えていることから、奥女中は四～五人はいると思われる。女性の旅は、特に武家の女は「入鉄砲に出女」と言われるように、厳しく規制

されていた。まず、江戸を出発するときには、箱根・今切の関所の通行手判を幕府留守居佐野豊前守へ申請して、五月一日に許可を貰っている。また、国元に着いた奥女中の内、老女代表使松尾^{おもてつかい}という女中が江戸に立帰ることとなったため、六月九日に京都所司代まで関所の通行手判の願いを出している。その都度、幕府の許可が必要になっていることが分かる。六月一二日に出発した奥女中松尾は、小泉兵衛・宇田川榕庵(医師)の二人の差添と共に京・大坂・伊勢を回り七月五日に江戸に帰っている。

ところで、女中たちの一行は、どれほどの規模で旅をしていたのだろうか。奥女中や差添の家臣は述べているとおりだが、この一行には、「国元日記」(文政元年六月二日)によると、人足一九人・軽尻馬^{かしろうま}一疋の先触れが昨夜到着したとある。

翌々年の文政三年帰国時には、三月一六日先触れの一団として人足三人・本馬一疋・軽尻馬一疋が出立し、同日夕刻には奥女中とその差添の家臣三人、人足一四人・本馬二疋の一団が出立したと記述されている。合計人足三七人・本馬三疋・軽尻馬一疋が女中一行である。ここから、女中一行は、差添の家臣を含む女中たち一団と荷物を運ぶ先触れの一団の

二つの構成になっていることがわかる。女中たち本隊の一団は、奥女中四～五人に、記録には出てこないが奥女中の世話をする下女たちが数名、差添の家臣三人と人足一四人、および記録には記されない陪臣などを入れると、少なくとも合計三〇人ほどの人数が一団となって旅をしている。

斉民の初入国

天保二年（一八三一）十一月、前藩主斉孝が致仕し、斉民が藩主となった翌三年春、津山へ初入国する。当初より津山藩は財政難に喘いでいたことから、將軍家斉の子といった立場を利用し、様々な優遇措置を願

い出ている。まず、初入国に際しては物入り多く、幕府へ五千両を拝借することを願い出て許されている（「祐筆日記」三月一四日）。また、国元へ供をする奥女中は、斉民が斉孝の養子として津山藩へ移ったとき、幕府より付けられた奥女中一三人のうち御守の園川・御次の小枝・呉服之間の國・三之間の嶋・仲居の澤ら五人が津山に供をするようになった。彼女らの給金はすべて幕府持ちになつており、三月一四日には彼女らの切米・合力金・扶持方・五菜銀・そのほか諸渡物、現代風に言えば、本給と諸手当全部の来年（天保四年）

四月分までを、まとめて出立以前に渡してほしいと願い出ていたものが許可された。「祐筆日記」によると、四月二四日園川ら五人と「御使番頭古代、御末宮路・花桐」の三人が出立したとあり、合計八人の奥女中が出立している。この時の奥女中たちを警護し供をした人数は不明であるが、差添の家臣は入江右膳・野間了庵（医師）・鳥沢喜八の三人で、五月一二日津山に着いている。斉民本隊は、女中出立より七日遅れの五月二日江戸を出立、同一八日津山に到着している。

翌四年三月二一日、女中たち一行が江戸へ向け津山を出立。女中たちの荷物を運ぶ道中人足三九人・本馬四疋・軽尻馬一疋の先触れ一団と、差添の家臣小沢四郎・丸尾良伯（医師）・村瀬茂七の三名を供とする女中たち一団が同日出立している。女中たち一団の女中数や人馬数は不明であるが、翌五年帰国時では奥女中五人ならびに下女ども合わせて一三人とあり、前年も同じ人数であったと考えられる。そしてそれに見合う人馬数であったと思うので、女中たち本隊の一団は、五〇人前後にはなっていたと考えられる。荷物を運ぶ一団と併せてみれば、前藩主斉孝の時より格段に多い人数になっている。

さらに、斉民付の女中は、幕府よりの御付女中であるから、街道の往還には特別な優遇措置があった。それが分かるのが、天保五年の江戸より国元への旅の時である。

天保五年二月二四日、津山藩邸が火災に見舞われた。この春、国元へ帰国するとき、類焼を機に斉民本隊の東海道往還の人馬不足を理由に「御定法人馬」五〇人五〇疋の外に二五人二五疋を増加してほしいと願っている。一応今年度限りで許可が下りている。この時は「当日人足七十五人、馬七十五疋、御定江戸銭を以継立之義、此度限り承届候、其餘不足之分者、手人馬、通し日雇又者相對雇可被致候」（「江戸日記」三月二日）とあり、願ひ出通り許可されている。しかし、人馬の費用は定法通り必要で、それ以上の荷物は手持ちの人馬や通し日雇または相対で雇う人足で賄えとある。これに対し、奥女中の場合は、どのように処理されたのだろう。

「三河守附女中五人并下女共都合十三人、此度帰国之節罷越東海道旅行仕候右女中五人者、御本丸分御扶持方茂被下置候もの、義二而、御定法之通二十五人二十五疋之人馬遣候」（「江戸日記」天保五年三月二日）としていたが、それでは不足なので、

さらに二五人二五疋を加えて五〇人五〇疋にしてほしいと願ひ出ている。「女中五人者御本丸分御扶持方をも被下置候」ものであるから、この度限り一日の継人馬五〇人五〇疋を許可するとの承諾を得ている（写真Ⅱ）。ここでは、女中の継人馬は、幕府持ちであり、幕府奥女中の身分で通行している。それを斉民はうまく利用し経費を浮かしていたとも考えられる。この御付女中に対する特例措置は、以後も毎年幕府へ願ひ出て許可



写真Ⅱ：津山藩「江戸日記」天保5年2～6月分の表紙（右）と同年3月2日条

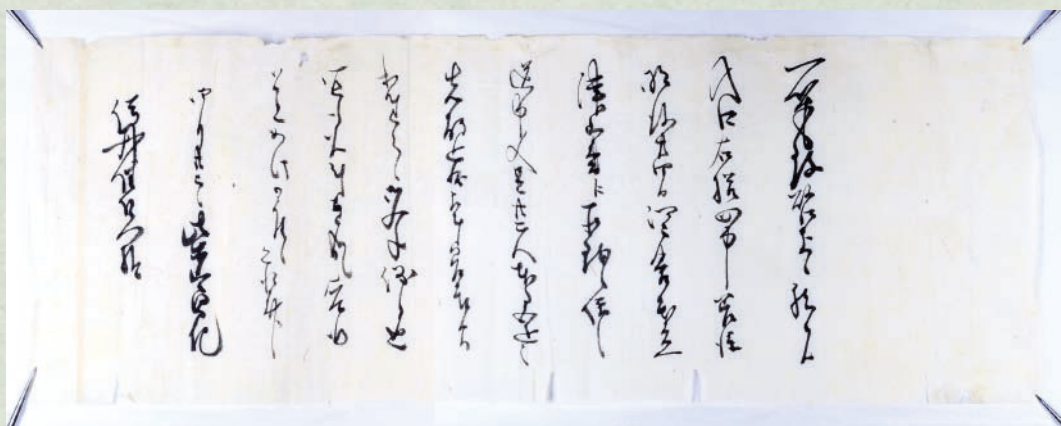
されている。天保一一年からはその記載がないので、この年から特例措置はなくなったと思われるが、その後も幕府の御付女中としての身分には変化はないので、依然として二五人二五正の継人馬の費用は幕府持ちであつたことには変わりはない。

奥女中の構成と行列図

藩主の参勤と相前後して旅する奥女中は、どのようなものが供をするのである。典型的な事例は、斉民の御付女中である。斉民五才で斉孝の養子になった翌年（文政元）の分限帳には、若殿様御守女中園川と亀尾、御付女中さよ・いそ・さの・ふく、呉服之間くに・みき・しま・つち・ゑ川、御仲居夕霧・いわ根の一三名が記されている。斉民（一九才）初入国の時に供として津山に行ったのは、前述の「守園川・次小枝・呉服之間國・三之間嶋・仲居澤」の五名である。澤のみ分限帳には登録されていないが、少なくとも天保一一年津山へ向け出立した時まで同一人物五名が供として津山へ行っていることが確認できる。藩主の幼少期から側で養育に当たった女中が、つねに藩主の日常の世話をしていたことが分かる。藩主も自身の好みや日常の行動をよく知っている女中が側にいることを

必要としたのであろう。それを可能としたのは、奥の組織からも推察できる。時代が上がるが、初代藩主宣富死去の翌年享保七年の江戸分限帳には、宣富付女中は「御表女中」とされ、正室付・姫付・藩主の養母付・実母付などそれぞれに独立して記載され、それぞれに年寄・中老などが必要に応じて置かれ、各付女中はグループ毎に独立して組織され、正室がすべて奥を統制管理したようではない。奥の組織がどのようにしてつくられていったのか、時代によってどのように変化したのかは今後の課題ではあるが、ここでは、藩主のことをよく知っている藩主付の「御表女中」が、他の付女中には影響を与えず、つねに藩主と行動を共にして江戸と国元を往復できる状況がある。次に奥女中たちの旅の出立ちはこのようなかものであつたのか。

池田家文庫には、寛政九年（一七九七）の「御先女中行列」②という文書があり、それには一〇人の奥女中に広敷と広敷番の二人の家臣が差し添えられ、乗物七台に足軽一三人・挟箱持ち八人・陸尺（駕籠かき人足）二十八人・下男一人、合羽籠持ち（雨具を運ぶ人足）と又下女（奥女中の下女）は「段々」と記され人数は書かれていなかったが、合計人数七〇



写真Ⅲ：先触れ文書（慶應義塾大学文学部古文書室所蔵 伊丹家文書 370）

【解説文】

一筆致啓上候、然者

入江右膳女中差添

明後廿四日、江戸表出立

津山表江罷越候、依之

道中人足廿二人本馬五正之

先触廻状取斗差上候間

相達候ハ、御入手、例之通

宜御取斗可被成候、右可得

御意、如此御座候

恐惶謹言

四月廿二日 柴山勇記

伊丹健左衛門様

人を超える行列となっている。行列は、乗物の両脇には足軽が付き、その後には道具を入れた挟箱持ちがそれぞれに付き、締めとして広敷と広敷番が家臣の最後に位置し、その後

合羽籠持ち・又下女の陪臣が列び、整然とした行列順序が記載されている。この文書の表題からも、藩主の行列とは別に女中が行列を立てて旅をしていることが分かる。また、岡

山藩の史料では医師の同行は確認できないのに対し、津山藩では常に医師が同行していることは興味深い。

三万石の岡山藩と比べれば、一〇万石の津山藩ではあるが、津山藩でも斉民の時には五〇人前後の人数になっており、それに東海道往還では幕府より支給される継人馬が利用でき、親藩の大名家として格式高く行列をしたと思われる。それを裏付ける御女中一行の先触れ文書も残されている。写真Ⅲの文書は天保三年（一八三二）四月二二日の書状③で、明後日の四月二四日に女中および差添が出立し、供には道中人足二二人・本馬五疋の一団が行くので、いつものようにお取りはからい下さいといった文書が送られている。このように、奥女中の行列も藩主の本隊と同じような先触れが廻り、少人数ながらきちんとした行列を作って江戸と国元を往還していたのである。

おわりに

では、文頭で述べた「拾万石御加増後初御入国御供立之図」の御先女中の図はどのように描かれているか。絵を見ていただきたい。女中差添小泉兵衛など三人の家臣の姿は描かれているが、女中は一人も描かれていない。先触れの一団とは別に、少

なくとも三〇人ほどの女中たち一団が行列をして旅をしている筈である。なぜ、女中の姿を描いていないのか。

大名行列図として図録などにもっとも多く紹介されるのが、この津山藩の行列図と「加賀藩大名行列図屏風」である。「加賀藩大名行列図屏風」は昭和一五年に完成したとされるが、江戸期に書かれた画像史料をもとに作成されており、かなり記録性・信憑性が高いという④。

明治一七年に完成された津山藩の行列図においても、最大限盛大に描くために、先遣隊や三日前に出立した御先女中一行および勝間田まで迎えに行った一行まで描き加えているが、その後の部分、つまり江戸を出発する藩主本隊部分からの行列は、「江戸日記」にある行列記録（文化一五年五月一六日）と、ほぼ同じ順序と人数が記されているようであり、当時の史料をもとに作成されたのではないかと思われる。つまり、近代になって作成された大名行列図も、その記録性としては、ある程度信憑性があると考ええる。

では、かなりの記録性がある津山藩の行列図に、態々、三日前に出立した御先女中の一団を描いているのに、なぜ女中の姿は描かれなかったのか、疑問がわく。描かれなかった

理由の一つは、大名行列は武威を示すための軍団として行列しているのだから、女を描くことを良としなかったのか、二つ目は、近代になり女性の公的存在を規制するジェンダーがより強くなったからか、図録・書籍等で見た範囲では津山藩以外の大名列図のほとんどが本隊のみ記され、先遣隊が描かれていないので、江戸期のものと比較しようがないのでなんとも言えない。しかし、どちらの理由にしても、女を表の社会から見えないものとして不可視化していることは確かである⑤。

「拾万石御加増後初御入国御供立之図」から、女中の参勤交代の存在を明らかにすることができ、また、その行列になぜ女中が描かれなかったかなど今後の課題も見えてきた。女性の視点から見直してみると、また違った歴史像に出会えるのではないだろうか。

注記

① 先行研究では、鳥取藩の奥女中について福田千鶴が「参勤交代における女性の旅」（『九州産業大学国際文化学部紀要第五三号』平成二四年一二月）で発表されているのみで、まだ奥女中の旅は研究の緒に就いたばかりである。

② 池田家文庫C五―三八二（寛政九年）作成年は記載されていないが、次のことから天保三年と確認できる。

まず、差出人の柴山勇記が「勘定奉行御徒頭兼帯」の役職を担っていた期間と、宛先の伊丹健左衛門の「大坂御屋敷惣目付并表勤銀主応対御金方目付東西飛脚御取斗」の役職期間が一致する文政一三年から天保五年の間に、文中に登場する入江右膳が女中差添として津山へ向け江戸を天保三年四月二四日に出立したことが、「国元日記」（五月一二日）に記載されていることによる。

④ 久留島浩「描かれた行列 武士・異国・祭礼」東京大学出版会 二〇一五年

⑤ 「行列にみる近世―武士と異国と祭礼と―」（国立歴史民俗博物館企画展示図録、二〇一二年）によると、『徳川盛世録』（市岡正一編 明治二二年）や『松の榮』（歌川国貞画、明治二二年）などの徳川家の姫君の行列図では、奥女中の姿が描かれている。しかし、参勤交代の大名行列図の中には見当たらなかった。

* 本文の主な史料は、「江戸日記」と「国元日記」による。とくに注記がないものは同史料で、上記以外の場合は典拠を記している。

津山市教委（生涯学習課）・美作大学共催

美作学講座

— 津山市史関連研究から —

第3回 10月1日

「美作の古代史

— 美作国をめぐる二・三の断章 —」

講師…今津勝紀氏

（岡山大学教授・編さん委員）



第3回の会場の様子

講師の今津氏は、現在岡山大学の教授として教鞭を執られ、日本古代の王権と社会の在り方について、地域に即したご研究をなさっています。また本市では、津山市史編さん委員として、古代の分野をご担当いただいています。

まず、和銅6年（713）の備前国からの美作国分立については、吉備を分割して勢力の弱体をねらったなど、吉備の勢力内での理由で語られることが多いのですが、この時期は、白村江の敗戦にともなう瀬戸内海沿岸防備の強化や、平城京遷都にともなう官道の再整備などにより、全国的に国の分立、郡の再編が行われているので、このような全国的な視点から、美作国の分立の意義を捉え直さねばならないと述べられました。

次に、吉備国内の河川などの地理的状况から、吉備と出雲の交流が盛んであったことや、その一方で、出雲の氏族は大和朝廷の内廷に仕える者が多く、朝廷に隷属していたのに対し、吉備の朝廷への従属関係はある程度緩やかであり、出雲と吉備では朝廷に対する距離が異なっていたことなどを解説されました。

最後に、これから編さんする津山市史の古代編では、今まで語られた点に加え、古代の飢饉や震災などの自然災害についても叙述していきたいとし、講演を終えられました。当日は70名余りの多くの方々が聴講に來られ、今津氏のお話を興味深そうに、熱心に聴いておられました。

※来年度も同様に、引き続き市史編さん関係者を講師として開催する予定です。今後とも「美作学講座」にご期待ください。

津山市史だより 第7号

発行：平成28年12月1日

編集：津山市史編さん室 〒708-0022 岡山県津山市山下92 津山郷土博物館内
TEL：0868-22-5820 FAX：0868-23-9874
Eメール：tsu-haku@tv.tn.ne.jp